ISSN 1346-7220

鹿児島大学総合研究博物館

THE KAGOSHIMA UNIVERSITY MUSEUM

News letter

NO.13

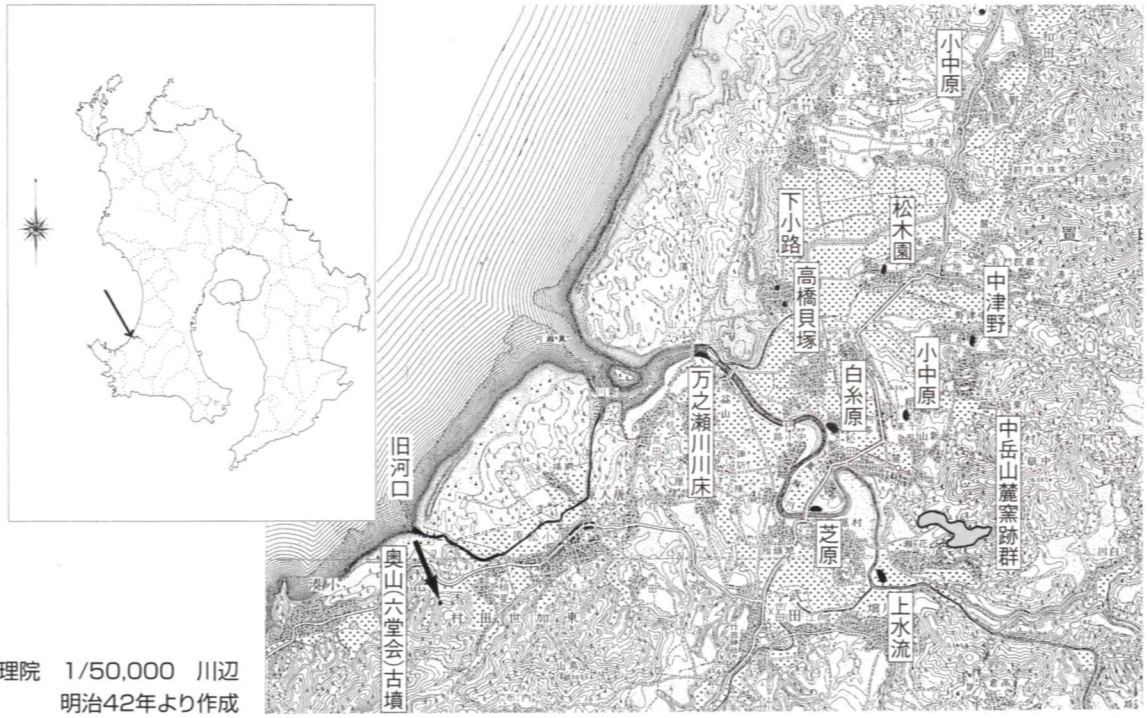
MARCH 2006

鹿児島のフィールド研究－列島西南端の古墳と地域間交流－

かつての日本に前方後円墳を中心とする古墳と呼ばれる大きな墓を造った時代があることはよく知られていると思います。西暦3世紀前半～6世紀末にかけて築造される古墳は日本列島の広い地域で共通する構造をもち、政治的秩序や社会的共通圏の成立過程を表す古代国家の形成研究の上で最も重要な資料です。その北限は岩手県、そして鹿児島は古墳が築造された南限の地です。

日本において古代国家ができあがる過程を明らかにする上では、多様な地域環境や社会的要因に目を向ける必要があります。そして、その際には境界領域の構造変遷に関する研究がその特質を明瞭にしうる可能性があると考え、総合研究博物館では鹿児島の古墳の調査研究を進めています。

これまでは、そのフィールド研究の中心を大隅半島において来ましたが、比較研究には南薩地域における古墳時代墓制を明らかにする必要があります。このような意図をもって、2005年に南さつま市において古墳の発掘調査を実施しました。



国土地理院　1/50,000　川辺
明治42年より作成

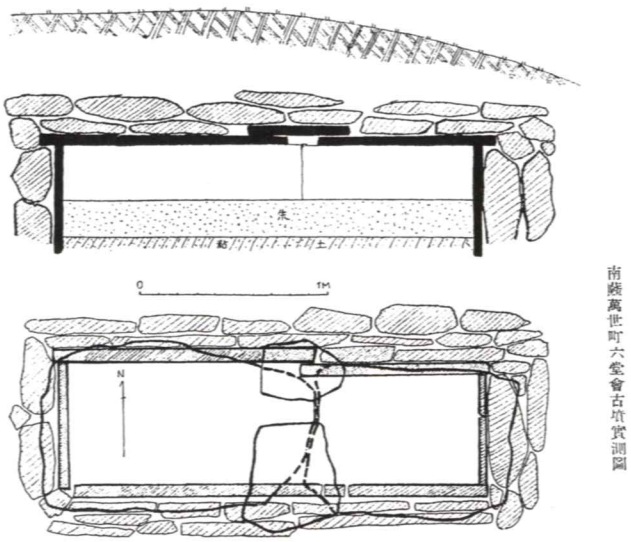
奥山(六堂会)古墳の位置と周辺遺跡

1. 調査研究の経緯

ここで報告する古墳は、1942年に「六堂会古墳」として学会に報告されたものです。以来、この名称で呼ばれてきましたが、「**六道江**」という地名がやや離れた場所に存在するものの、現地に「**六堂会**」の地名は存在しないことが地元では以前から問題となっていました。そのため、今回の調査を経て地元の教育委員会は当該地の小字名をとって名称を「奥山古墳」と変更しています。

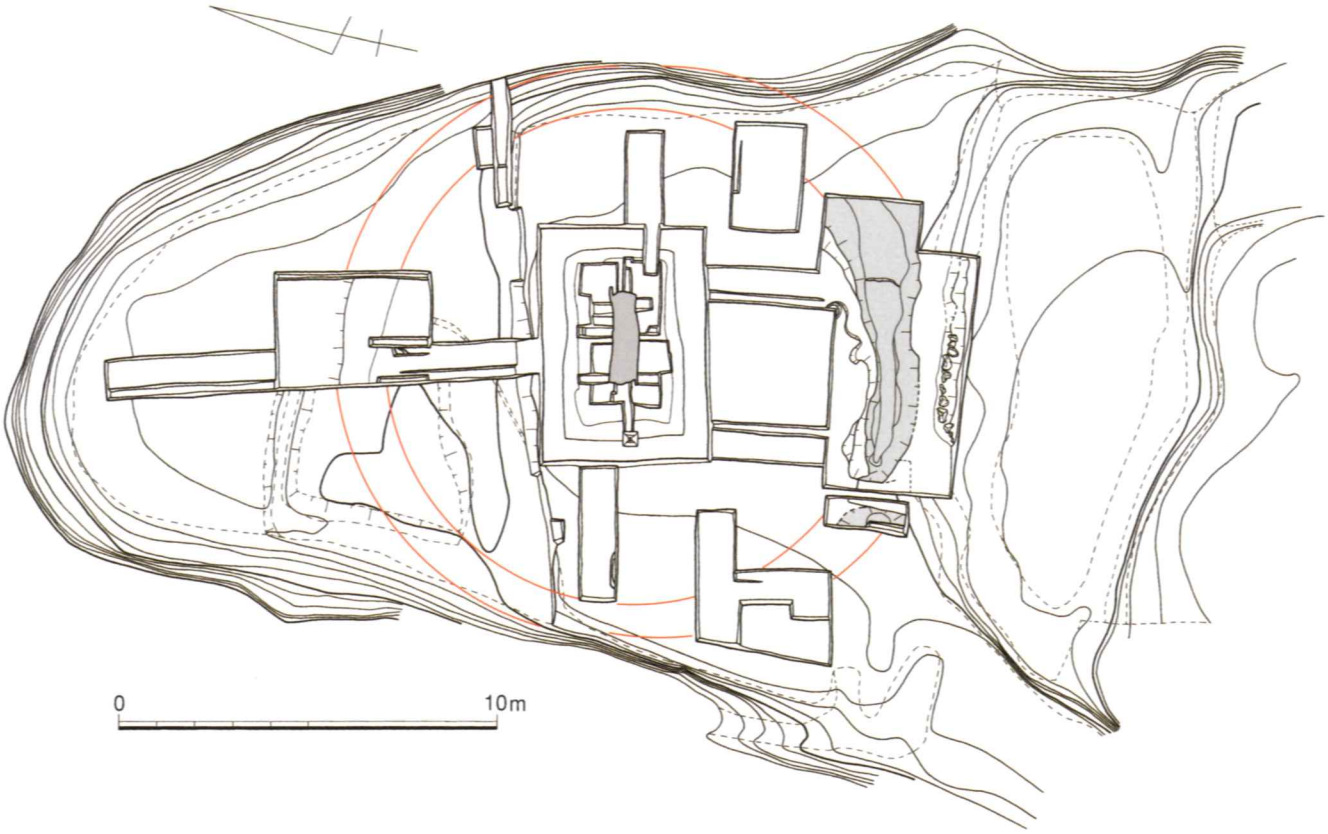
南さつま市加世田小湊所在の奥山古墳は、薩摩半島南部で唯一の石棺墓です。この石棺墓は天草諸島・宇土半島など東シナ海沿岸南部に広く分布する古墳時代墓制です。

本古墳の石棺は1931(昭和6)年に地主が畑開墾中に発見し、1941(昭和16)年に考古学研究者・藤森栄一氏が来訪した時に氏の指揮によって発掘調査が行われています。



昭和16年調査時実測図

この調査によって、蓋石上を角礫が覆うこと、埋葬頭位は西向きで石棺内が赤色に塗られていたこと、底石はなく粘土上に赤い土が敷かれていること、鉄剣・刀子・ガラス玉など出土したことが略測図とともに報告されました(土持鋤夫・住谷正節1942「薩摩万世町六堂会古墳」『古代文化』13-3　日本古代文化学会)。しかしながら、その後、今日まで再調査されることはなく、現在の研究資料として利用できるものではなくなっていました。そこで、今回、石棺の再調査と墳丘構造の確認を目的として発掘調査を実施しました。



奥山古墳墳丘平面図

2. 奥山古墳の発掘調査

立地と環境

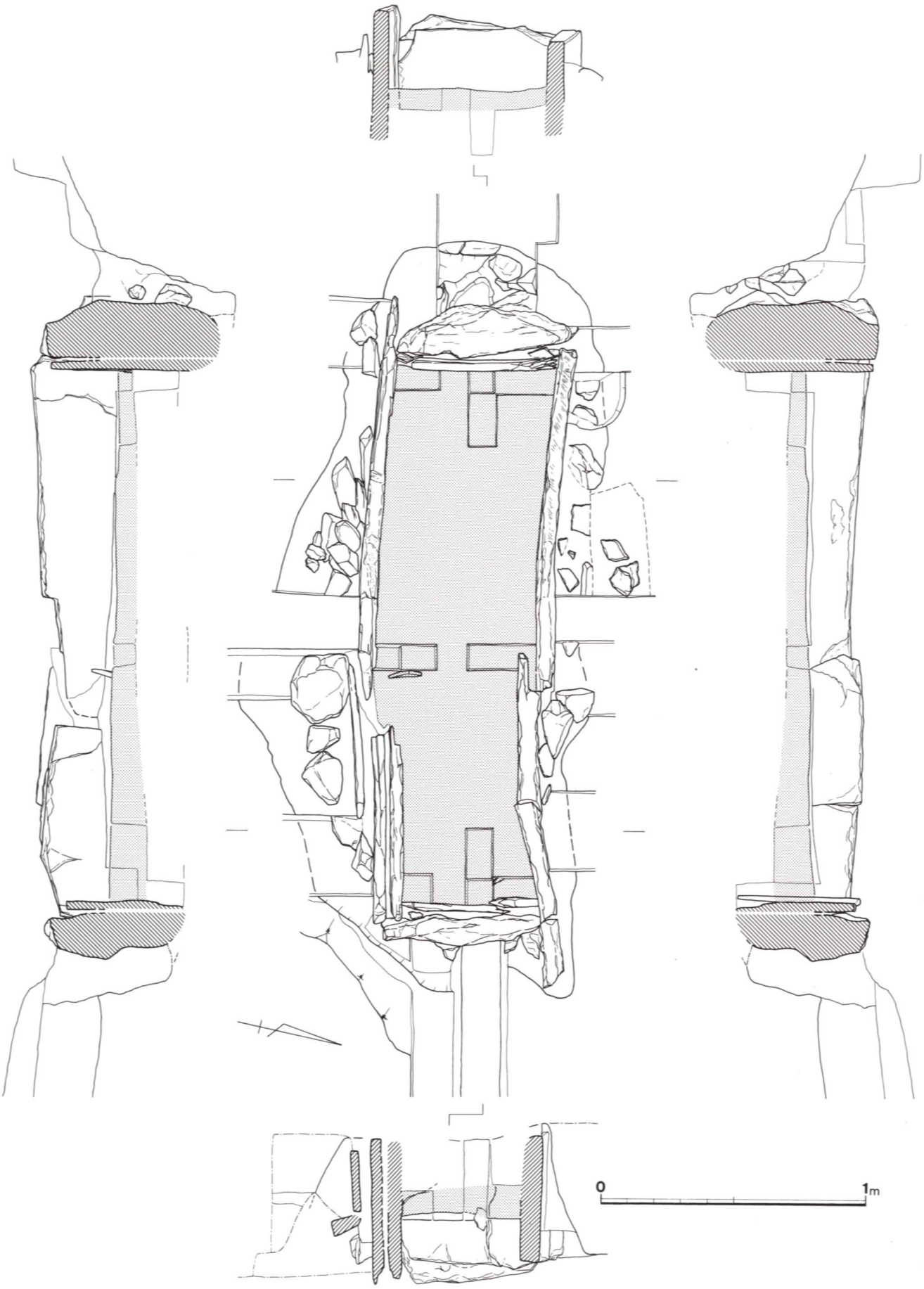
奥山古墳は薩南平野の南端の南北に延びる標高約9mの低い尾根の先端上に位置しています。周囲は低湿地となり、北側には砂丘が発達するラグーンの環境をよく残した場所です。この地域の最大河川・万之瀬川の河口は北へ約1km付近にあったと考えられ、近くには後世の船つなぎ石などもあり、古墳時代にも周辺が入り江状の環境であったと考えられます。すなわち、本古墳は薩南平野の入口である万之瀬川河口近くの入り江の丘陵上という眺望に優れた、とても目立つ位置にあります。

石棺の構造と技術

石棺は長軸を東西にとり、長辺に2枚、短辺に1～2枚の板石を組み合わせて造っています。全長は259cm、最大幅72.5cm、長辺内法200m、西小口内法61cm、東小口内法51cmを測ります。いずれの石材も高さは50cm以上あり、そのうち30cm程度を埋めているので、人体が葬られる石棺内部の高さは20cm程度です。石棺に底石はなく、厚さ10～15cmの赤色土を敷き、さらに下は石材下端まで粘土で埋めています。

石棺長側石(長辺の石)には小口石(短辺の石)を嵌め込むための溝を掘り、そこに小口石を挟み込んでいます。そのため、両者の間には隙間がなく、きわめて密着した状態を保っていました。また、長側石は2枚以上の石で造られていますが、その継ぎ重ねには、両側の石に刳り込みをつくり、はめあわせて重ねていました。小口石は材質の違う2つの石を内外に重ねて立てる特徴があります。また、長側石の一部にはチョウナタタキ技法と呼ばれる石棺製作時の加工痕跡があります。

奥山古墳からみた景観



奥山古墳石棺平面図

箱式石棺に見られるこのような技法は、熊本県上天草市千崎古墳群などに代表される天草諸島－宇土半島で顕著に見られるものです。奥山古墳周辺には他に石棺墓がなく、この地で石棺製作技術の伝統が存在したとは考えられませんから、この古墳の石棺には天草－宇土地域の工人の石棺製作技術が用いられているとみて良いでしょう。

石棺

石棺石材

石材には、砂岩(長側石)、安山岩(蓋石・両小口内側石、長側石)、凝灰岩(両小口外側石)の三種が確認できました。

長側石として用いられている砂岩は石英質アレナイトという石です。安山岩と凝灰岩は薩摩半島でも入手可能ですが、石英質アレナイトは薩摩北端の鹿児島県長島以北、とくに天草地域に顕著に分布するものです。すなわち、砂岩は搬入品、安山岩・凝灰岩は在地品の可能性が高く、石材を持ち寄り1つの石棺を造っているとみなされます。石材からもこの石棺に天草－宇土地域の石工集団が関与しているものと考えられます。

石棺細部

墳丘構造－墳丘区画溝と渡り土手－

石棺周辺の調査区では、近代以降に大きく丘陵を削平し、丘陵先端部を多量の土砂で埋めて地形を改変して、畑地を造成していることが判明しました。古墳築造時の丘陵は現状よりも幅が狭く、先端はなだらかであったと考えられます。

石棺南側のトレンチ(調査区)では古墳墳丘を区画する溝を検出しました。上部は削平されていましたが、最大幅180cm、深さ55cm以上の溝が長さ5.6m以上にわたって残存し、弧状に巡っていました。墳丘区画溝は尾根主軸中央部付近から、東側斜面に向かって深さを増します。この調査区の成果からこの古墳の墳形は円墳であると考えています。

石棺より北側では畑の造成土の下に、地山を削り出したテラス面が存在することを確認しました。尾根の東・西側は削り落とされており、墳端の構造は不明ですが、溝が巡る余地はないので、北側同様にテラス面が巡って墳丘を区画したものと考えています。墳丘南側の区画溝底と北側の墳端位置からこの古墳の規模は直径約13.5mと考えています。

また、墳丘区画溝は尾根主軸中央部付近で浅くなり、そのやや西よりの位置で終息して途切れています。この終息部はやや軟質で均質な土の上に、地山由来の礫混じり土を載せて強く固めて渡り土手を造っています。ただし、渡り土手より西側は大きく改変され旧地形が残存しなかったため、その構造は十分に追求できませんでした。

墳丘区画溝

土器出土状況

出土土器

土器の様相

墳丘区画溝内部からは土器片が多量に出土しました。土器は溝の底部付近におかれたものが転倒し、流土中に混ざったものとみられます。

整理中のため未確定ながら、高杯7～8、小型丸底壺5(台付含む)、壺1、甕1個体程度が確認できます。小型丸底壺3、台付小型丸底壺1、直口壺1は区画溝下層からは良好な状態で出土しました。

この小型丸底壺はいずれも底部中央に穿孔があり、高杯には杯部中央から脚部を貫通する穿孔や杯部側面に孔のあるものがあります。

いずれも土器製作中に意図的に開けたもので(焼成前穿孔)、一括の祭祀土器とみられます。その特徴から、これらは古墳時代前期後半(4世紀後半)に位置づけられます。

これらのうち、壺には在地の成川式土器の影響がみられます。また、高杯や小型丸底壺などは在地生産が考えられるものの、非在地系の土師器の影響を受けていると見られます。この土器群は古墳祭祀にともなう要素としてもたらされた情報により成立したものと考えられます。その直接的な情報源はまだ十分に検討できていませんが、地域間交流がその背景にあることは間違いなく、古墳祭祀の展開を検討する上でも重要な資料といえます。

3.列島西南端の古墳

薩南平野は縄文時代以来、鹿児島を代表する標識遺跡が継続的に営まれた地域です。しかしながら、今後、新たな古墳の発見が続くとは考えられず、非古墳築造地域といえます。南薩地域では奥山古墳以外に古墳時代中期後半(5世紀後半)とみられる推定直径17.5mの円墳、指宿市弥次ヶ湯古墳が存在しますが、当地域の主要な古墳時代墓制は指宿市成川遺跡で典型的にみられるような土壙墓群でしょう。ほかにも海岸砂丘上の土壙墓・土器棺墓などが知られます。列島西南端の一般的な古墳時代墓制は土壙墓による集団墓に代表され、点的に古墳が現れますが、首長墓としての古墳墓制は導入されず、継続的な首長系譜も形成されません。

そのような中、一時的な存在ではあっても奥山古墳が石棺墓であり、墳丘をもち、古墳祭祀も執り行っていたことが判明したことは古墳築造に関わる複合的な葬送観念、技術、古墳を必要とする当地域の社会的背景が存在したことを示しており注目に値します。

この古墳が築造される地域内での文脈を見いだすとすれば、日本列島の南北を結ぶ海上交易拠点を掌握し、古墳時代社会に連なった南薩の地理的位置づけが大きな役割を果たしていると考えられるでしょう。とくに、古墳築造に天草－宇土地域の集団が密接に関与していることが明らかで、その出現に地域間交流が大きな役割を果したことは疑いえません。

薩南平野は南島へ向かう九州西回り航路において、農耕を基盤とする社会を形成した最後の平野だと考えられます。また、南島から渡り来る最初の平野です。この地域が中世以降には南島航路の拠点地域として栄えたことはよく知られています。

この薩南平野のなかでも、その南端にある奥山古墳は、南島からの人が最初に目撃する古墳時代社会であり、古墳時代人が最後に渡る場であったものと考えられます。そこに、この古墳の存在意義があるのではないでしょうか。奥山古墳は古墳時代社会南西部の境界を画する象徴的な存在であったと考えます。

4世紀後半ごろの古墳時代前期後半、広域の地域間交流に関わり、その境界の拠点を掌握することで薩南平野に現れた有力首長が奥山古墳に埋葬された人物ではないでしょうか。

橋本達也

資料紹介

鹿児島大学構内遺跡出土の古墳時代紡錘車

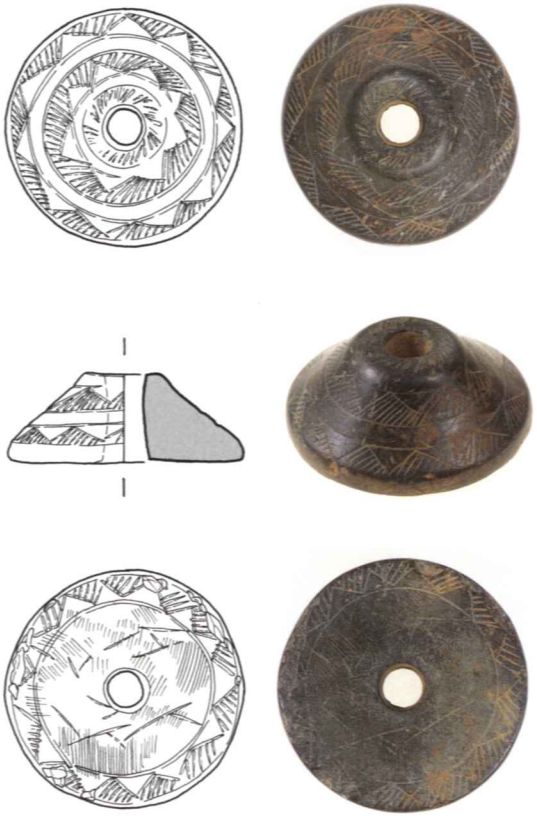
今回紹介するのは、鹿児島大学郡元キャンパス(以下、鹿大構内)の総合教育研究棟を建設する際の発掘調査中に、古墳時代の住居址(SK42)から出土した紡錘車です。紡錘車とは、糸を紡ぐための「紡錘(つむ)」という道具の一部で"おもり"の役割をなし、中央に開いた孔に棒を刺して、それを回転させることで繊維に撚りをかけて糸を紡ぎました。

本資料は直径4.2cm、高さ1.6cm、孔径0.7cmをはかる濃緑褐色の石製紡錘車で、側面観は厚めの台形を呈し、丁寧に磨かれたあと全面に細い沈線による文様が施されています。その文様は、沈線や器形に由来する稜線によって区画された鋸歯文帯(連続する三角形の文様帯)を基本とし、それが傾斜面には2条、底面には外縁に沿って1条みられます。また、鋸歯文を平行斜線によって充填しているのが特徴です。底面の内側は擦痕によって文様が不明瞭ですが、鋸歯文ではない文様が施されていたかもしれません。

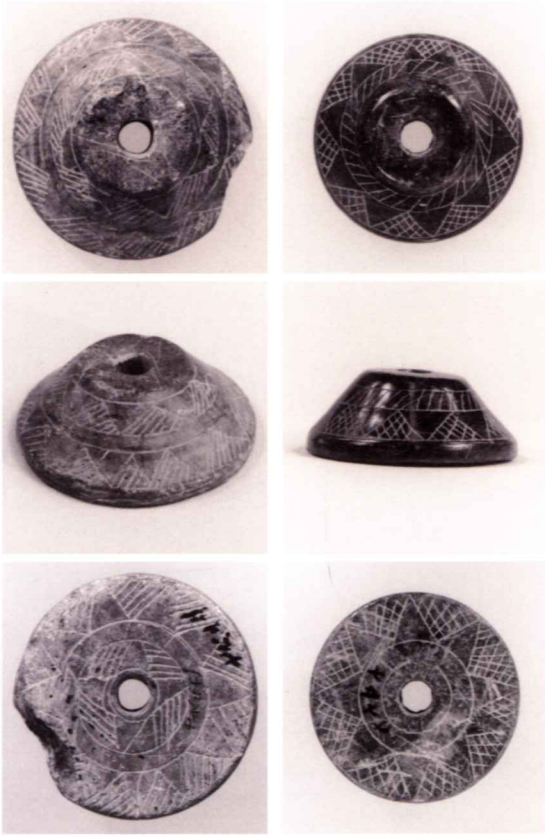
時期について

まず、本資料と酷似する紡錘車が京都府羊ヶ谷古墳から発見されています。本資料と同形同大で全体が丁寧に磨かれており、文様も2条構成で底面内側以外に違いは見られません。当古墳からは5世紀後葉 (TK47型式)の須恵器も見つかっており、鹿大構内出土資料の年代を考える上でも参考になります。同じく、和歌山県西庄遺跡1号住居跡でもやや小型ながら2条構成でよく似た文様の紡錘車が出土しており、やはり同時期の須恵器を伴います。

一方、岡山県喜兵衛島13号墳、三重県高猿古墳にも類例が見られますが、文様構成が若干異なります。両者とも斜面・底面に鋸歯文帯は1条しか施されず、鋸歯文は平行斜線ではなく格子文で充填されています。この両者と比較すると、先に挙げた2条構成の紡錘車の方がより手の込んだ文様であるという印象を受けます。大きさという点でも鹿大構内・羊ヶ谷古墳出土例に比べるとやや小ぶり(3.6～3.7cm)ですが、両者は酷似しています。この両古墳において6世紀初頭(MT15型式)の須恵器が確認されていることから、鋸歯文帯が2条で構成される紡錘車と1条で構成される紡錘車とのあいだには出現に時期差がある可能性も考えられます。いずれにしろ、これまで検討してきたような紡錘車は文様構成や大きさに明瞭な規格性が認められ、存続期間が限定される特徴的な遺物であり、鹿大構内出土の紡錘車が5世紀後葉～6世紀初頭(TK47～MT15型式)に該当することは間違いないようです。



鹿児島大学構内遺跡出土
(鹿児島大学埋蔵文化財調査室所蔵)



京都府羊ヶ谷古墳出土　三重県高猿古墳出土
(東京国立博物館所蔵)
Image:TNM Image Archives　Souece:http://TnmArchives.jp/

性格について

文様構成や大きさにみられる規格性から、上述してきたような紡錘車には特定の生産地、あるいは供給地があったと考えられます。またこれらは各地に点在すること、丁寧に磨かれ精緻な文様が施されていることから、実用品という枠を超えた"稀少品"として扱われ、流通していたことでしょう。そのことはいくつかが古墳の副葬品として出土していることによっても裏付けられます。では、鹿大構内遺跡でこの紡錘車がみつかったことは何を意味しているのでしょうか。ここで注目すべき点は、前述した遺跡のうち、西庄遺跡・喜兵衛島遺跡群がともに塩をつくる製塩遺跡であることです。生活必需品をつくった製塩遺跡ような場所には、当然、人・モノ・情報のより頻繁な往来が想定され、稀少品はそういった流れの中でもたらされたと考えられます。これまでの発掘調査によって、鹿大構内には県内有数の古墳時代集落が存在していたことがわかっていますが、この紡錘車は南九州、あるいは鹿児島湾沿岸地域において当時の鹿児島大学構内遺跡が人々の交流や物流の面で重要な役割を果していたことを端的に示していると思われます。

【参考文献】

近藤義郎(編) 1999 『喜兵衛島』喜兵衛島刊行会 岡山

東京国立博物館(編) 1988 『東京国立博物館図版目録・古墳遺物篇(近畿Ⅰ)』東京国立博物館

冨加見泰彦(編) 2003 『西庄遺跡』(財)和歌山県埋蔵文化財センター

鹿児島大学大学院人文社会学研究科 甲斐康大

2006年前半の予定

3月15日(水) ラオス、ウドムサイ県コア郡農林業事務所
3月16日(木) ラオス、ウドムサイ県ナーサン村小学校
巡回展 "Decorating with plants: Job's tears materials from the world"
協力:総合地球環境学研究所 プロジェクト4−2「アジア・熱帯モンスーン地域における地域生態史の総合的研究」森林・農業班: ラオス国立農林業研究所

5月13日(土) 13:00〜15:00
第6回 自然体験ツアー「鹿児島湾海藻ウォッチング—水の中のゆたかな森へ—」
寺田竜太(鹿児島大学水産学部)
集合場所:桜島ビジターセンター(現地集合、現地解散(桜島港より横山方面に徒歩10分)
雨天決行(ただし高波の場合は中止)、定員20名(応募者多数の場合は抽選)

5月20日(土) 13:30〜15:30
第6回 公開講座「作ってみよう! 海藻おしば」
寺田竜太(鹿児島大学水産学部)
場所:鹿児島大学水産学部学生実験室、定員20名(応募者多数の場合は抽選)

6月3日 (土) 13:30〜15:30
第11回 研究交流会「天然記念物という文化財」
桂 雄三(文化庁文化財部記念物課 主任文化財調査官)
場所:総合教育研究棟2F203号室

鹿児島大学総合研究博物館 News Letter No.13
■発行/2006年3月31日 ■編集・発行/鹿児島大学総合研究博物館 〒890-0065 鹿児島市郡元1-21-30
TEL:099-285-8141 FAX:099-285-7267
http://www.museum.kagoshima-u.ac.jp/